



○2学期終業式講話「命の尊さ」

令和4年もあとわずかとなりました。コロナ禍の生活も3年が経ちました。そんな中、我慢強く感染症と向き合ってくれていることに感謝するばかりです。2学期は、学校行事や部活動ではつらつとした姿を見ることができ、研修旅行では楽しそうな顔を見ることができ、本当に嬉しく思います。一方で、毎日のように新規患者数が発表されていて、その数の多さに麻痺すら覚えることもあります。亡くなられた方はすでに5万人を超えました。



今年9月に本校で広島市在住の三浦さんを講師に「命の大切さを学ぶ教室」がありました。これまでこうした講演を、本校・分校で定期的に行っています。前は、斐川町にお住まいの江角さん夫妻の講演でした。約3週間前の山陰中央新報でも取り上げられていました。江角夫妻は、1999年12月次女の真理子さん(当時20歳)を相手の飲酒運転による交通事故で突然亡くされ、それからの長い年月、癒えない気持ちと向かい合いながら、講演活動を20年以上続けておられます。当時高校生だったご長男の3年担任をしていたこともあって、弔問に行った日の事を今でも思い出します。命の大切さを身にしみて感じた瞬間でした。先日、三刀屋高校や掛合分校の活躍を再三見聞きし、エールを送りたいと江角さんから連絡がありました。その最後に「12月は命日病になります」とありました。胸にこみ上げるものがありました。

1999年に3年担任をした時は、生徒の家が深夜火事になり焼け出されるなど、命の大切さについて考えさせられる事が他にもありました。中でも、内地留学で2年間学校を離れ、久しぶりに教壇に立った1999年4月始業式の日、生徒が自転車でトラックにひかれ意識不明の重体となった日の事は鮮明に覚えています。それからクラスや部活動、生徒会などの生徒たちと一緒に、目を覚まさない彼を励ましに病院に通う日々が続きました。3か月後彼の生きる力が奇跡を起こし、目を覚ましました。その後懸命にリハビリをして、1年遅れで卒業。1年早く卒業するみんなに寄せた手記が、当時の勤務校のPTA通信に掲載されました。数年後、彼の結婚式での幸せそうな笑顔を見て、親子の絆、友の絆、命の尊さをあらためて感じました。

校長室だより第60号で海老原宏美さんの最期の講演に触れました。その講演で、命の価値について触れておられます。「命の価値は平等という言葉は耳にすることがあるが、命にはそもそも価値はない。価値があるものは、ダイヤモンドのように価値が上がったり下がったりするものである。命に価値があると考えるのは、現代社会が価値を求める社会だからである。役に立たなければいけない、生産性がないといけないうような価値観に縛られている一面があると思う。生きていくというだけでも素晴らしいことではないか。屋久杉や富士山は、ただそこにあるだけで、行けば勇気などがもらえる存在である。価値はそもそもあるものでなく、つくられるもの。命はつくるものではない。あるだけで尊い。だから大切。」と話されていました。

校長室だより第62号で触れた、映画「道」の一場面で『私は何の役にも立たない女よ』と言うジェルソミーナに、綱渡り芸人が『この世の中にあるものは何かの役に立っているよ。』というシーンがあります。命はあるだけで尊く、生きていけば必ず何かの役に立っているのです。日野原医師も言われたように、本当に大切なものは目に見えません。例えば命のように…。絵本『しょうぼうじどうしゃ じふた』のお話のように、その存在には必ず意味があるのです。

有意義な冬休みとなるように学習、読書にしっかりと時間を使ってください。みなさんにとって来年2023年が、素晴らしい年、躍進の年になることを願って、終業式にあたっての話とします。